

## 姉妹校——パリ第7大学歯学部



この日は、私の人生におけるハイライトであった。1985年（昭和60年）9月18日、私は、ソルボンヌにあるパリ第7大学歯学部において姉妹校の調印をした。同校の最上階にあるサロン風の古い図書館で、ナディン・フォレスト歯学部長と姉妹校同意書に署名した。

そのとき、私は舞い揚がっていたらしく、儀式上のミスをした。サッサと、自分の愛用の万年筆でサインしてしまったのだ。彼女は一瞬戸惑いをみせながら、にこやかに手持ちのペンでサインした。同意書を交換したあと、彼女は、さり気なく自分のペンを私の手に贈った。このとき儀式用に用意されたペンと気づいて、私は、あわてて「ソーリー」と口走っていた。毅然として、貴族の趣のあるフォレスト女史は、のちにパリ第7大学学長になる。

パリ第7大学歯学部は、1883年（明治16年）にパリ歯科医学校として創立された。フランス最古のデ

ンタル・スクールである。所在地の通りの名称から、ガランシェールと通称される。同日、その名を冠したフランス最大の歯科学会「ガランシェール学会」が、パリ歯科医師会の主催により同校で開催されていた。その学会の記念式典の席上、両校の姉妹校提携が披露されることになっていた。

調印式のあと、私たちは、同校から程近い国会議事堂へ移動した。私は、すっかり親しくなった教授のロジャー・ギシャルと、助教授 M. ルエルーケラーマン夫妻と談笑しながら石畳の道を歩いた。彼は、往年のフランスの名優ジャン・ギャバンにそっくりの飄軽な好漢であった。

去る5月に姉妹校の話し合いに来た時、彼は、私より片言の英語に難渋していた。ところが、数ヶ月後に再会した彼の口から、滑らかなイングリッシュが流れてきた。びっくりして聞くと、「貴方がまた来るというので、夏休みにロンドンへ行って、1ヶ

月間、英会話学校に通った」と言う。

思いがけず、フランス人の篤実と友情に接して、私は言葉を失った。同時に、同種の言語なので、たった1ヶ月でこれだけ流暢に喋れるのだと、彼我の余りの違いに慙然となった。

そのあと、私は、またミスってしまう。「あの学部長は、お幾つですか？」と他愛なく尋ねた。44歳の私より、年上か年下か知りたかったからだ。その途端、ギシャールは卒倒せんばかりに驚天した。シマッタと、悔んだが遅かった。ヨーロッパの貴婦人の御年を問うという無作法——。しっかり者の正統派美人ケラーマンが、聞こえぬふりをして「あそこよ」と、堂々たるゴシック建築の議事堂を指した。

午後六時、陽はまだ明るい。

会場の華麗な参議院大ホールには、ガイ・ペン大統領顧問（前歯学部長）、パリ第7大学学長、パリ歯科大学協会会長、ガランシユール学会会長、フランスの16国立歯学部の歯学部長、第7大学歯学部の教授等、フランス歯科界の代表約300名が参列した。錚々たる顔ぶれ、絢爛たる会場……たいへんなセレモニーである。

式典は、まず社会福祉連帯省（厚生省）次官、文部省次官の祝辞に始まった。幾人もの挨拶が延々と続く。私は、主催者席の二列目に日本人通訳と並んでいた。隣席では、日本大使館の日本人公使が、彼らの挨拶を聞きながら、汗を流して必死に挨拶文を手直ししている。気の毒なほど緊張していて、声も掛けられない。

進行は、ミッテラン大統領の親友というペン大統領顧問が仕切っていた。フランス人は個人主義者なので、挨拶に立った諸氏は、いずれも勝手気ままに長々と話す。祝宴の時刻が迫ってきたらしく、ペン顧問は貫禄十分、「やらなくていいよ」と公使の肩をポンと叩いた。

茫然としている公使を飛ばして、紹介をうけて最後に私が演壇に立った。日仏の姉妹校提携を喜ぶと挨拶を始めると、ザワついていた場内が鎮まり返った。フランス人は、東洋ジャポネ好きだ。私の日本

語がよっぽど珍しい響きだったのだろう、興味津々、水を打ったように聞き入っている。

「さて、私ども日本歯科大学の名誉学長である中原實は、約65年前に5年間、このパリに滞在していました。彼は第一次世界大戦に際し、フランス陸軍歯科医として従軍し、ヴァル・ド・グラスおよびビシーの戦時陸軍病院に勤務しました。画家をも志していた彼は、終戦後パリ・アカデミーグランシヨミエールなどに通って、もっぱら油絵の修業をしました。

1923年に日本に帰国した彼は、その年、2つの歴史的な役割を果たしました。その一つは、当時まだ全く無名だったパリ派の画家、アメデオ・モジグリアニを初めて日本に紹介しました。もう一つは、歯科医学の父と謳われる貴国フランスのパイオニア、ピエール・フォシャールを初めて日本に紹介したのです」

半世紀余り前の日仏の因縁に耳を傾けていた聴衆。ここで私は、この逸話にオチをつけた。

「中原 實は92歳で今なお健在ですが、実は、彼は私の父親ですので、このたびの姉妹校提携は、私にとってとりわけ印象ぶかい出来事であります」

ここで、会場がワッと沸いて、共感の拍手が鳴り響いた。偶然にも写真は、そのときの光景を捉えた。正面席の左から、社会福祉連帯省次官、文部省次官、フォレスト歯学部長、通訳、ペン大統領顧問。皆、一様に破顔一笑している。

演壇に本学校旗を掲げた私は、予想もしなかった満場の華やかな反応に痺れていた。中原 實の逸話と父子関係は、芸術文化を好むフランス人の琴線に触れたのだ。

会場では気づかなかったが、あとで写真を見て、今更ながら私はフランス文化の奥深さに打たれた。高いガラス窓の外は夕暮れて、演壇の私の横顔と壁の優美な額が、シャンデリアに照らされて、窓側の高い鏡面に鮮やかに映っている。私は、異なる両面から演者を際立たせる見事なデザイン演出に、感嘆するばかりだった。

（写真撮影：小倉英夫〈当時〉助教授）